
臆病者の妖日記

森井蘭丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

臆病者の妖日記

【Nコード】

N1962H

【作者名】

森井蘭丸

【あらすじ】

雨の降る日、いつものように友人の由紀と学校へ向かっていた立夏は一匹の不思議なしゃべる猫と出会う。その猫は「リオウ」と名乗り自身を妖だと告げる。自分の声が届いた立夏にやってもらいたいことがあるという。臆病者の立夏と妖達との長い日々が始まるうとしてた。

第一話・出会い

シトシトと降る雨。

何日か前に梅雨入りしたこの地域では今日も冷たい雨が降っている。まわりつくような湿気に私は思わず顔をしかめた。

胸元まである髪ときりそろえた前髪が首元やおでこにはりつく感じがして結んでしまおうかと思ったが、生憎今日は髪ゴムを忘れてきてしまった。

「帰りたい・・・」

まだ登校途中にもかかわらずそう呟いた。

「あのねりつか、まだ学校にすら着いてないんですけど！」
とお！とふざけながらチョップしてきたのは友人の安達由紀。肩の辺りまでの髪を耳の下で二つに結んでいる私と同じくらいの背丈の笑顔が可愛い女の子だ。中学の時こちらに越してきた私に一番最初に話かけてくれたのが由紀だった。

『ねえねえ！あなたも東京から来たんでしょ？あたしもつい最近東京からここに越してきたの！名前なんて言つの？』

『えっと・・・橘たちばな立夏りつかです』

『あたしは安達由紀！よろしくね！！』

引っ込み思案で臆病者の私に由紀が声をかけてくれたおかげで、少しずつ周りの人達とも打ち解けることができた。私の良き理解者であり親友なのだ。ちなみに「りっか」とは彼女がつけた私のあだ名だ。「りっか」より「りっか」の方が呼びやすいというのでそう呼び始めた。私はなかなか気に入っている。あだ名をつけられるというのは嬉しいものだ。

そんな事を思いながら歩いていると由紀が口を開いた。

「確かに雨は毎日のように降ってるしジメジメしてるし、帰りたくなる気持ちもわかるけどね・・・」

そう言つと傘ごしに暗い空を見上げた。つられて私も空を見上げる。

雨は嫌いだ

何でかと聞かれたら困るが暗い空を見てると何だか胸がしめつけられるような感覚に陥る。「切ない」とかではない、どちらかといえば「恐怖」に近い。理由はよくわからない。そこには何か「忘れてる」「事があるような気がするがまったく思い出せないし高校生になった今でも支障はないので思い出す必要はないと思っていた。

なんとなく暗い気持ちのまま由紀と肩を並べて歩いていると校門が見えてきた。由紀と一緒に良かったと思う。一人だったら帰っていたかもしれない。それくらいさつきから胸騒ぎがしていた。

とりあえず早くにぎやかな場所に行きたくて足早に校門を通ろうとした。その時

「聞こえるか」

いきなり後ろから男の人の声が聞こえた。周りには私と由紀しかない。その言葉は明らかに私達に向けられた言葉だった。

驚いて後ろを振り返るとそこには誰もいなかった。見渡してみても男の人どころか人っ子一人見当たらない。それはそうだが、ここには私と由紀しかいないのだから。おかしいな、と思いながらふと視線を下にやると一匹の猫がいた。グレーにとろどろ白毛が入っているまだら模様の猫だった。猫はじーっと私を見ていた。思わず私も見つめていると

あ……たの……しい

え？何・・・？何か聞こえた・・・？由紀・・・ではなさそうだし、じゃあ誰が・・・

キーンコーンカーンコーン・・・

「やば！ちょっとりっか！そんなトコで立ち止まってるって遅刻だよ！！」

予鈴と由紀の声に八つと我に返った。

「う、うん！ちょっと待って！！」

そう言っただけで私は走る由紀を追いかけ教室を目指して急いだ。途中気になって後ろを振り返ってみると、猫はまだ私を見つめていた。

シトシト・・・

午後の授業が始まって窓の外は朝と変わらなかった。自然とため息が出る。朝見た猫の事を思い出してチラと校門を見ているがもう猫はいなかった。

「なーんか考え事？」

放課後、ぼんやりとしていた私に由紀が声をかけてきた。特に考え事をしていたわけではなく心配させてしまったことに申し訳なくする。

「うっん、全然！強いていうなら今日の夕飯何かなーって思ってた！」

「あっそ」

なんだか呆れられてしまったようだが、心配してもらおうよりはずつといいので黙っておいた。

鞆に教科書などを入れてクラスメイト達に手を振り一人教室を出た。帰りは由紀が部活がある為だいたい一人で帰っている。

私達一年生の教室は昇降口から一番遠い三階にある。いつもなら階段を降りていると誰かしらに会うのだが今日は誰ともすれ違わなかった。いつもなら気にならなかったのだろっけど今日は一人で帰るのがなんとなく嫌だったので誰かに声をかけようと思っていったのだ。「仕方がない、一人で帰る……」

靴を履きかえて学校を出る。相変わらず空は暗かったがもう雨は降っていないかった。

ぬかるんだ道をゆっくりと歩き校門を出たところでまた猫の事を思い出し辺りを見渡したが、やはり猫はいなかった。自分でもなんでこんなにあの猫が気になるのかわからなかった。

「ま、いつか！ただの野良ちゃんだしね」

そう自分に言い聞かせ歩き出そうとした時だった

「聞こえるのか」

「……」

また聞こえた。朝の時と同じ男の人の声だ。心臓が高鳴り今度は逃げられないように勢いよく振り返った。

「…っ！朝の…野良ちゃん？」

振り返った先にはあの猫がいた。朝の状況とまったく一緒だ。

「あたしの空耳だったのかなあ…あ、もしかして…あなた？」

ちよつと怖くなった私は誰も見ていないのを確認して冗談で猫に話しかけた。

「なーんてことあるわけないか…」

「聞こえるのか？」

一瞬…いや、何秒間は凍り付いた。確かに聞こえた。しかも声がした方には猫しかいない。ギギギ…っという音が聞こえてきそうなきごちなさでもう一度猫を見てみると…

「私の声が聞こえるのか？」

今度は確実だ。目の前の猫が喋ったのだ。体中から血の気が引いた

「ふむ、やはりお前には聞こえていたんだな、私の声が。やっと私の存在に気付く者が現れ…」

「ぎゃああああー！」

猫の話を守るように悲鳴をあげて私は駆け出した。途中で振り返る

事なく一目散に家へ走った。

玄関の鍵を開け階段を駆け登り自分の部屋へ駆け込み扉を勢いよく閉める。

「な…な…つ、な…んなの…!?!?」

全力疾走したために息がいまだに整わず脳に十分な酸素が行き届いていないせいかククラクラする頭で先程の事を思い出す。

「ね、猫が喋っ…た?」

いや、普通に考えてそれは有り得ない。だとするとさっきのあれは何?夢…だったのだろうか

「そっか、夢だ!ありえないもの!やだなああたしってばいつ寝ちやっただらろ」

「歩きながら眠れるとは嫌な意味で天才だな」

「何よしつれい…ね…」

心ない台詞にムっとして言い返そうと振り向いて目を見開いた

「ずいぶん殺風景な部屋だな。もっと女らしい部屋にできないのか」

「ひいひい!!」

いつの間に入ってきたのかさっきの猫が窓際にちょこんと座って部屋の感想を述べた。私はとても女らしいとはいえない叫び声で壁に張り付いた。

「ゆ、夢?まだ夢の中なの!?早く起きて私!」

「残念ながらこれは夢ではない。現実だ」

そう言うとき軽やかに床に着地し私に近づいてきた。私はこれ以上下がったら壁にめり込むんじゃないかというくらい壁に体を押し付けて逃げようとする。

「そんなに怯える事はない。何もとって喰おうというわけではないんだからな」

「わ、わ、私になんの用なんですか…!」

絞り出すように出した声は変にうわずっていた

「お前にはどうやら“見る”素質があるようだ」

「“見る”…素質？なにをです…か？」

「あやかし妖をだ」

妖…つまり妖怪を“見る”素質が私にあるということなのか。しかし今までそんなものは見た事がなかった私は怪訝な顔をした。それを見た猫は

「私の声が聞こえたのが何よりの証拠。見る力のない者には私の声は届かない」

確かにこんな風に喋る猫がいたらとつくに有名な話になっているはずだ。誰もこの猫の存在を知らないのはおかしい。

「つ、つまりあなたも妖…って事…？」

「そういう事だ。名はリオウと言う。元々は力のある妖だったのだがある人間の組織に力のほとんどを封じられてしまったのだ。」

「化け猫…？」

猫の妖怪、つまりは化け猫かと口にするとう毛を逆立てて口を荒げた「阿呆か！私は化け猫などではなくもつと高貴な妖だ！！力が封じられた時、姿を保っていられなくなったので近くを通ったこの猫に体を借りているだけだ」

ひとしきり自分の事を話し終わると猫…リオウは私を見つめた。

「お前、何か違和感を感じないか？」

「違和感…？」

いきなり何を聞くかと思えば。いきなり違和感を感じないかと言われるも…と考えていると

あ……たの……しい

ズキン…！

まただ・・・何か聞こえる。

「どーかしたのか？」

「朝から誰かの声がするの・・・なんかこう、頭に直接入ってくるというか」

そう言うとりオウはにやりと笑い

「それは恐らく妖の声だ。お前の力は微弱で普段は何も感じないだろうが私が近くににいる事で力が強くなって妖の音が聞こえるようになったのだ。そのうち姿も見えるようになるだろう。」

「は!?!」

力が強くなる??妖の声・・・?姿が見えるようになる・・・!?!?何を言っているのかわからなかった。いや、わかりたくもなかったが。というかそのうちって・・・ずっと私のそばにいるって事!?!「やっと私の声が届く人間が現れたのだ。簡単に逃がしてやるわけなからう。お前にはやってもらいたい事があるのだ」

「何勝手な事言ってるの!?!あたしは何もやらないから!?!というかできないから!?!妖なんて見えないし感じないんだから!?!」

ただでさえ臆病な私に妖怪と関われと!?!?とんでもないことだ。絶対に嫌だ。

「お前に拒否権はない。もしどうしても断るといふなら、私に力が戻ったら一番にお前を喰いに来てるぞ」

「なっ・・・!」

喰うだなんて言われたら何も言い返せない。ただの脅しかもしれないが本気だったら困る。というか怖い!!

「クツクツク、言う事を聞く気になったか。さっそく明日から妖を見る訓練をしてやる。楽しみにしておけ」

その言葉を聞いて私の体からどんだん力が抜けていき目の前が真っ暗になった。

こつして臆病者と妖との長い長い日々が始まるつとじていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1962h/>

臆病者の妖日記

2010年12月21日02時58分発行